

## ジギタリスを考える（モダレーター緒言）

劔物 修\*

ジギタリスは200年の歴史を持つ薬物でありながら、未だその薬理作用は完全には解明されていない。ジギタリスの心臓に対する作用は①陽性変力効果 (positive inotropy) と②陰性変伝導効果 (negative dromotropy) にある。したがって、うっ血性心不全、心房細動・粗動の治療薬として高く評価されている。米国ではジギタリスは第4番目に多く処方されているという。ジギタリス使用患者の20%程度に何からの副作用が認められ、ジギタリス中毒はその臨床使用を制限している。近年、ジギタリスの血中濃度が測定されるようになった。ジゴキシンで 2 ng/ml 以上の血中濃度で中毒症状をみるとされるが、 $K^+$  イオン濃度、心筋障害の有無、年齢などによりこの濃度は変ってくる。

麻酔や手術の場にくる患者では長期連用薬物のひとつとしてジギタリスがある。麻酔科医としては次のようないくつかの疑問をもっているが、これまでに明快な答は必ずしも得られていない。

- ① この薬物はどの位使用されているのか、
- ② 術前の血中濃度はどの位に維持する必要があるのか、
- ③ 術前の予防的投与は必要なのか、そして安

全なのか、

- ④ 術中ないし術後の急性心不全に使用される薬物なのか、
- ⑤ 麻酔薬や麻酔中に使用される諸薬物との相互作用は、

などがそれである。そこで、これらの疑問に対する解答を権威者から出していただくと考えて、誌上シンポジウム「ジギタリスは現在どれだけ用いられているか」が企画されたわけである。

今回、幸いにも、ライフワークとしてジギタリスの薬理に取り組んでおられる藤野澄子先生、臨床の場で実際に使用しておられる佐藤友英（内科）、松尾準雄（小児科）、藤田毅（外科）、の各先生、それに麻酔科を代表して古谷幸雄先生に企画していただくことができた。モダレーターとしてもまた雑誌「循環制御」編集委員の一人としても、このシンポジウムに期待するものは大きく、ジギタリスに対する知識を整理することができれば、このシンポジウムの目的は達せられると思っている。

本企画に御協力をいただいたシンポジストの各先生並びに循環制御編集室の方々に深謝申し上げて、モダレーターの緒言としたい。